

2024年度成人科テキスト

月刊 「ぶどうの木」

2月号



「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、
わたしたちの心は燃えていたではないか」
(ルカ24:32)

名前

目次

証し	宮下達也兄	・・・ 1
解説・マタイによる福音書③		・・・ 3
第44課 イエスの愛による権威		・・・ 5
ショートメッセージ：田中由記子姉	聖書日課：工藤征治兄	
第45課 蛇のように、鳩のように		・・・ 9
ショートメッセージ：郷健人兄	聖書日課：宇佐美典子姉	
第46課 「天の国」を共に		・・・ 13
ショートメッセージ：栗山義重兄	聖書日課：渡部和子姉	
第47課 この岩の上に		・・・ 17
ショートメッセージ：郷秀男兄	聖書日課：小沢敬一兄	

表紙イラスト：友納聖子姉

おしらせ

- 成人科は毎週日曜日 10：15～50 地下フェロシップホールにて行っています。ぜひご出席ください。
- ショートメッセージの動画は、教会ホームページからも視聴できます。上部メニューから「教会学校」をクリック→「成人科」をクリック
- ショートメッセージと聖書日課を、メールで受け取ることができます。ご希望の方は成人科奉仕者（ショートメッセージ、聖書日課の執筆者）にお声がけください。
- 「ぶどうの木」のボックスへの配布をご希望される方も、奉仕者までお知らせください。

真昼のように

い の ち を か け ー て あ い を し め さ れ た イ エ
 ス さ ま に 出 会 い す べ て が 変 わ っ た わ
 た し は あ な た に な に を も っ て
 ん しゃ を あ ら わ せ ば い い の だ ろ う
 ま ひ る の よ う に ー かが や き な が ら
 ー あ な た の あ い を つ た え た ー い
 ー イ エ ス さ ま の よ う に ー かが や き つ づ け る
 ー 世 の ひ か り に ー し て く だ さ い ー

証し

宮下達也 兄

自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、
あなたと同じように支払ってやりたいのだ。(マタイ20:14)

成人科で皆様と共に聖書を学び、交わりのひと時を持つことは私にとって大切な時間であり、週の始まりの欠かせないルーティンとなっています。成人科で奉仕してくださっている皆様には本当に感謝いたします。

私は成人科が始まる直前まで小学科で奉仕をしています。子供たちは寒い日でも暑い日でも元気の塊で、揉みくちやにされつつ日曜日の朝を過ごしています。小学科が終わる都度、毎回『もっとうまい伝え方はできなかったのかな』などと一人反省しながら、ほっと一息を付けるのが成人科の時間となっています。

常盤台教会には小さい頃から教会学校に通っていた方や当時CSで奉仕されていた方、また、それぞれの青年会時代を熱く楽しく過ごされた方々がたくさんいらっしゃいます。そういった方々からは、互いに聖書を学び篤い信仰を高めつつ、時には楽しいだけでなく様々な学びや経験をされたお話を聞きました。どの方のお話を聞いても当時の楽しそうな雰囲気が伝わってくるため、成人科で世代関係なくお話を聞かせてもらうことが大好きです。

私は40歳を過ぎてからバプテスマを受け、クリスチャンとしては中途入社組です。

「ぶどう園の労働者」のたとえでいえば、私は12時ごろに主人に声をかけていただいたグループなのかもしれません。ただ、神様は『何時』かは関係ないと教えてくださいます。

神様が1人1人に合わせて用意してくださった『時』があり、何時だろうが変わらず愛と恵みを分けてくださいます。

クリスチャンとしてCSや青年会を遡って経験することはできませんが、これからの未来で成人科などを通し皆さまと共に聖書を学び、交わりの時を持ち、信仰の友としてお互いに歩ませていただけたら幸いです。



解説・マタイによる福音書③

【主の祈り】

マタイによる福音書 6章9～13節

6:9 だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。

6:10 御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

6:11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

6:12 わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

6:13 わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

●主の祈りと頌栄

私たちの教会でも、「主の祈り」は礼典や公同の祈りの場で皆で心をあわせて祈ります。また、個人で密やかに祈ることもあります。私たちの教会で祈られている「主の祈り」の本文はマタイ福音書、ルカ福音書(11:2～4)に頌栄が付加されていることに気づきます。

～主の祈り～

天にまします我らの父よ、願わくは御名をあがめさせたまえ。み国を来らせたまえ。みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。国とちからと栄えとは限りなくなんじのものなればなり。アーメン

「主のいのり」はイエスさまから弟子たちに教えられて以来、カトリック、プロテスタントそれぞれの歴史のなかで大切に守られて来ました。現在、聖公会以外の日本の多くのプロテスタントの教会では、「1880年訳」とされる言葉を基にして「主の祈り」を成文化して祈られています。この「1880年訳」とは「明治訳(明治13年)・新約全書」を指します。

ここでは「**国とちからと栄えとは限りなくなんじのものなればなり。**」の言葉が頌栄(神の栄光を誉めたたえよの意)として6章13節に付加されています。その由来としては日本の「明治訳」までに至る聖書翻訳の歴史のなかで生み出されて来たものと言えます。

このように「主のいのり」に付加されている頌栄の言葉は、カトリックのラテン語聖書「ウルガタ」には見られませんが、ルター訳や欽定訳には見られます。翻訳の底本としてギリシャ正教系のギリシャ語新約聖書から由来したのかもしれませんが。(諸説あります)

主の晩餐式のように礼典において用いるために、聖書にある「主のいのり」に「頌栄」を付加した「主の祈り」を取り入れてきたようです。礼典以外の場面では「頌栄」を付けない祈りしている教派もあります。そこまでに至る聖書翻訳研究は別の機会に委ねたいと思います。

【参照】主の祈りと頌栄・原 真和(聖和短期大学教授)

● マタイ福音書にある「主のいのり」

マタイ福音書にある「主のいのり」を誰の為にイエス様は教えられたのでしょうか。マタイ、ルカ福音書のどちらも弟子たちに向けたものです。つまり、「主のいのり」は弟子たちの祈りであることが聖書に明確に記されています。それは「主のいのり」の意味は主イエス・キリストの弟子とならなければ本当には理解することができないとも言えるのです。

● 「主のいのり」にある祈願

最初の三つの祈願は神と神の栄光に関するもの、次の三つは私たちの求めと必要に関するものです。神に最高の位置づけがなされて初めて、私たちのすべてのことが整えられていくと教えられています。私たちの求めと必要は「現在・(生命のパン)」「過去・(罪の赦し)」「未来・(試みに会うときの助け)」を求めて、現在、過去、未来のすべてを神の恵みの前に差し出すことにあります。

● 「御名が崇められますように。」

「主のいのり」のなかで「御名が崇められますように。」、「主の祈り」のなかで「ねがわくはみ名をあがめさせたまえ。」が一番説明が難しい祈願と言われます。私たちはどのように理解すればよいのでしょうか。「私たちに御名(み名)をあがめさせてください。」というような意味でしょうか。原文からは「あなたの御名が聖なるものとされますように」という意味もあるようです。「御名を崇める」「聖なるものとされる」ためには、神が存在していることを信じなければなりません。聖書は神が存在していることを証明しようとはしていません。私たちは神の存在を確信しなければなりません。

私たちは神が世界に満ちておられると確信し、神を忘れない日々を感謝し、み言葉に従う信仰生活が時に不安や恐れがあっても**「ねがわくばみ名をあがめさせたまえ。」**

「御名が崇められますように。」と祈ることが求められているのです。その求めにこたえて祈ることで自分のための祈りから神のための祈りへとひきあげていただけるのです。自分で神の御名を高めようとか、聖めようとする思いからも解き放たれるのです。

● 「御心が行われますように、天におけるように地の上にも。」

マタイ福音書にあるこの祈願はルカ福音書(11:2~4)には記されていません。ルカの伝える方が、主の教えてくださった原型に近いとされることから、マタイがこの祈願を書き加えたこととなります。十字架の道を歩まれるイエス様のゲッセマネの祈りから神の御心は天にも地にも満ちていることを確信してマタイは「主のいのり」に書き加えたのではないのでしょうか。

「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」マタイ26:39

【参考図書】

マタイ福音書(上) ウィリアム・バークレー 1967年 ヨルダン社

山上の説教・下 加藤常昭 1980年 ヨルダン社

霊的成長をもたらす4つの習慣 リック・ウォレン 2008年 PDJ

(文責・郷秀男)

第44課 イエスの愛による権威

聖書箇所：マタイによる福音書8章5－13節

主題聖句：帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。(13節)



5さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、6「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。7そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。8すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。9わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」10イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言うておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。11言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。12だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」13そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病氣はいやされた。



マタイによる福音書の5章から7章には山上の説教が記されています。そのうちの二つについては、第42課、第43課で学びました。続く8章、9章は、九つの奇跡物語で構成されていますが、本日の学びの聖書箇所はその一つです。

イエスさまが山から下りて、カファルナウムに来られた時の出来事です。一人の百人隊長がイエスさまに近づいてきて、病に苦しむ僕を癒してほしいと懇願します。

カファルナウムはユダヤ人の町ですが、当時はローマ帝国に支配されていました。百人隊長はローマ帝国の命令のもと、最前線でユダヤの人々を武力で押さえつけていました。また、ユダヤ人は選民思想を持っていて、異教徒を軽蔑していました。ですから、百人隊長がユダヤ人であるイエスさまに懇願することも、ユダヤ人であるイエスさまが百人隊長の願いを聞き入れることも、当時の社会ではあり得ないことでした。

恥も外聞もなく、イエスさまに僕の癒しを願い出た百人隊長に対して、イエスさまは、「わたしが行って、いやしてあげよう」とおっしゃいますが、百人隊長は、「来ていただくには及びません。一言おっしゃってくださるだけで十分です」と答えます。

百人隊長がこのように答えた理由は二つあります。

一つ目は、自分はイエスさまを家にお招きできるようなものではないと思っていたからです。当時の社会通念として、ユダヤ人は異教徒を穢れたものと見ていましたから、異教徒である自分の家に来ていただくことは申し訳ないと思ったのでしょう。それだけではなく、イエスさまに、自分たち人間とは違う何かを感じ取っていたのかもしれない。

二つ目は、イエスさまの言葉に権威があることを信じていたからです。家に来て、僕の上に手を置いていただかなくても、お言葉をいただければ、癒されることを信じていたのです。

世の中には言葉があふれています。人を助ける言葉、励ます言葉、傷つける言葉、だます言葉…

しかし、イエスさまの言葉は人間の言葉とは全く違います。イエスさまの言葉には神さまの権威があり、権威のある言葉には力があります。

「権威」という言葉の意味を国語辞典で調べると、「他の者を服従させる威力のこと」と書かれています。人間の社会の中で「権威」というと、地位が上の人やある分野で知識や技術が優れているため、信頼されている人を思い浮かべます。しかし、イエスさまの言葉の権威は、神さまの愛から来るものです。そして、信仰とは、神さまの言葉が実現すると信じることです。

そうは言っても、私たち人間は弱いものです。遠くからの言葉だけでは心もとなくて、近くに来て、触れていただきたい、目で見、手で触って確かめたいと思ってしまいます。

ところが、百人隊長はとても信仰深かったので、神さまの言葉が実現することを信じていました。その信仰にイエスさまは感心し、ユダヤ人よりも強い信仰を持っていると驚かれたのです。ローマ皇帝は絶対的存在であったのに、ローマ皇帝ではなく、イエスさまの言葉に神さまの権威があることを認めているのです。私たちも、固定観念やしがらみ、世間体などにとらわれず、心の目で正しいものを見抜くことができる人になれるよう、願います。

自分の地位にあぐらをかいて、外の暗闇に追い出され、泣きわめいて歯ぎしりすることのないように、そして、百人隊長のように、驕ることなく、へりくだり、イエスさまに感心していただけるように、主の言葉をただただ信じて、その救いにあずかってまいりましょう。

～分かち合い～

- 私たちはイエスさまに直接お会いして言葉をいただくことはできませんが、聖書や礼拝メッセージなどから日々、神さまの言葉をいただいています。その言葉に神さまの力を感じたことはありますか？
- イエスさまに感心していただけるほどの信仰を持つために、私たちはどうしたらよいのでしょうか？

2月3日（月） ルカによる福音書7章1－10節

1イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。2ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。3イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに行って、部下を助けに来てくださるように頼んだ。4長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。5わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」6そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いに行って言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。7ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないとおぼやかしく思いました。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。8わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」9イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。「言うておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」10使いに行った人たちが家に帰ってみると、その部下は元気になっていた。

ルカ7章3節で、「イエスの事を聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使い行って、部下を助けに来てくださるように頼んだ」とあります。イエスさまはユダヤ人の長老たちと一緒に出かけられ、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は「主よ、ご足労には及びません。私はあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」とあります。イエスさまに来るように頼んだのに、丁重に断わっている事情は、ローマ帝国支配下のユダヤ人社会を理解する必要があるようです。

2月4日（火） ヨハネによる福音書4章43－54節

43二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。44イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。45ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなさったことをすべて、見ていたからである。

46イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気があった。47この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。48イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。49役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。50イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。51ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。52そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。53それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこぞって信じた。54これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

当時の人々は、イエス様に自分の家族・知人の病気を治してもらう事を望んでいました。ある時から病気を治す奇跡をしなくなると、人々はイエスさまから離れて行きました。目に見えないイエスさまの教えを信じる事は当時の人々にも難しかったのでしょうか。

2月5日(水) 列王記下5章9-10節

9ナアマンは数頭の馬と共に戦車に乗ってエリシャの家に来て、その入り口に立った。10エリシャは使いの者をやってこうさせた。「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」

江戸時代末迄の日本の仏教僧侶は医術も学んでいたようです。聖書には皮膚病に関する記述が多くあります。神の人-エリシャも医術を学んでいたと考えられます。アラムの軍司令官-ナアマンの皮膚病の治し方も知っていて、効用ある清らかなヨルダン川の水で洗う事を指示しています。

2月6日(木) マルコによる福音書13章9-13節

9あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。10しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。11引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。12兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。13また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

宗教改革する者とその賛同者は既存宗教から叩かれ、迫害されます。パウロ初め多くのクリスチャンが苦難の道を歩まれました。そのお陰で現在の我々クリスチャンが生かされています。

2月7日(金) ルカによる福音書21章12-19節

12しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。13それはあなたがたにとって証しをする機会となる。14だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。15どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。16あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。17また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。18しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。19忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

統治者による宗教迫害はどこにでもあるように、江戸時代の「踏み絵」がありました。赤ちゃんイエスさまを抱いたマリヤの「踏み絵」を踏まなかった人は処刑されました。家に家族を抱えた人は踏んだと思います。その踏んだ人々が、隠れキリシタンとして後世にキリスト教を伝えました。

2月8日(土) ローマの信徒への手紙16章17-20節

17兄弟たち、あなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに反して、不和やつまずきをもたらす人々を警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。18こういう人々は、わたしたちの主であるキリストに仕えないで、自分の腹に仕えている。そして、うまい言葉やへつらいの言葉によって純朴な人々の心を欺いているのです。19あなたがたの従順は皆に知られています。だから、わたしはあなたがたのことを喜んでいますが、なおその上、善にさとく、悪には疎くあることを望みます。20平和の源である神は間もなく、サタンをあなたがたの足の下で打ち砕かれるでしょう。わたしたちの主イエスの恵みが、あなたがたと共にあるように。

私達クリスチャンはバプテスマによって、神との個人契約によって結ばれています。現在の日本では詐欺紛いの宗教もあり、宗教アレルギーで、聖書の話しをなかなか理解してくれません。工夫が必要です。

第45課 蛇のように、鳩のように

聖書箇所：マタイによる福音書10章16-25節

主題聖句：だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。(16節)

16「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。17人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。18また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。19引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。20実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。21兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。22また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。23一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきり言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。

24弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。25弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者はもっとひどく言われることだろう。」

マタイによる福音書10章では、全体を通して12人の弟子を選び、各地へ派遣するまでが書き記されています。1-5節では12人の名前と共に、彼らが「汚れた霊に対する権能」を授けられたことが書かれ、5-15節では持つべき心構えやするべき行動が具体的に語られています。8節に「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。」とあるように、弟子たちに与えられた力には大きなものがありました。その上で、彼らが驕りたかぶったり、金銭を要求するなど間違っただ道に進んだりすることを防ごうとされたのか、「ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」とも語られています。神さまから無償の愛を受け続けている私たちも、奉仕や伝道を行う際にはこの御言葉を大切にしたいですね。

さて一方でイエスさまは、弟子たちを迎え入れず耳を傾けもしない人がいたら「その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。」とも教えられ、その町は裁きの日にソドムやゴモラよりも重い罰を受けると語られました。謙虚な思いは持ちつつも、福音を宣べ伝えるのだから、自信をもって堂々と行きなさい!と、イエスさまがドンと背中を押すような“熱さ”を5-15節からは感じるのです。

その上での、本日の箇所となる16-25節です。そこまでのエールのような言葉から一転して、イエスさまは弟子たちが受けるであろう迫害について語られます。「狼の群れに羊を送り込むようなもの」とは凄い言葉です。6節では「失われた羊のところへ行きなさい」と、伝道の対象となる人々が「羊」と呼ばれていました。イエスさまから力をいただき派遣された弟子たちであっても、あくまで一人の人間、弱い羊に過ぎないことが分かります。

一方で「地方法院」「提督」「王」といった言葉に象徴される、既存社会で強い力を持ち、イエスさまの教えに反発する勢力は正に狼の群れであり、羊1匹など簡単に打ち倒すことができます。日本バプテスト連盟が大切にしている「信教の自由を守る日」が近いこともあり、権力によって信仰が妨げられないことの恵みを感じます。

一連の箇所を読むと、イエスさまからの警告を前に弟子たちが縮み上がっても不思議ではないと感じます。しかし、警告と共に語られる愛ある助言が、勇気をも与えたのでしょ。その助言の象徴となる言葉が、16節の「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」です。この箇所は前後の文脈と切り離して、一つのフレーズとして覚えている方も多と思います。

印象に残りやすい理由の一つは、賢さの象徴として蛇を出している意外性にあるのではないのでしょうか。エデンの園において蛇は人を罪へと誘い、呪われた存在となりました。もちろん、「蛇のように」という言葉は本当に蛇を知性の象徴としてポジティブに捉えているのかもしれませんが、“あの”悪賢い蛇にも立ち向かえるような柔軟な賢さを身につけましょう、といった風に敢えて持ち出している可能性もあると思います。羊が狼の中で立ち回るには、真正面からぶつかるだけではない賢さも必要ということです。

実際、私たちが誰かに伝道したいと思うとき、ただ聖書の教えや自分の信仰を語りたように語るだけ、ということはずいぶん無いです。相手の話を聞くことはもちろんですし、語る際もどのように、何を語れば伝わるかを一生懸命に考えるはず。貪欲に吸収したいと思っている人、知的好奇心に根差している人、ほとんど心を閉ざしている人…それぞれに合った言葉や語り口を選ぼうと思うその熱心さが、イエスさまの求める賢さではないでしょうか。

ただ、「策士、策に溺れる」のように頭でっかちにならないよう、自分の中に鳩のような素直さも必要なのだと思います。イエスさまは20節で「話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。」と教えてくださいました。聖霊なる神の導きを信じ、素直に身を委ねることもまた、「一生懸命考える」ことと同じくらい、いやそれ以上に大切なのだと思います。本当に語るべき言葉は主が与えてくださる、という安心感の中で、それぞれにできる伝道を担ってまいりましょう。

～分かち合い～

- 今の世の中で伝道をしていくことも、「狼の中に羊を送り込むようなもの」と感じられますか。また、その理由は何でしょうか。
- 伝道をする際に必要な「賢さ」と「素直さ」とは具体的にどのような思い、行動を指すのか考えてみましょう。

2月10日（月） ローマの信徒への手紙 | 5章 | 3節

希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるよう。

今日の世界の状況を見ると、希望、喜び、平和は実現可能なのか？神の国は実現するのか？と未来が不安でいっぱいになります。被団協の創業メンバーであり長年代表を勤められた故坪井直氏は「核兵器廃絶は現実的には難しいでしょう？」という問いに「いや意外と簡単なんよ。そう、みんなが赦せばいい。今の大人が赦し合うことでしか未来の子どもたちの平和は来ない。」と答えたそうです。未来に希望を持ち、平和を築く勇気を強く祈り求めています。

2月11日（火） テサロニケの信徒への手紙 | 2章 | 3節

このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。

テサロニケの人々の内に神の言葉が生きて働かれたので、偶像からまことの神に立ち帰ることができました。それは絶えず感謝せずにはいられないほどの喜びでした。神さまと出会い、聖書の良き知らせ・福音（神の言葉）の働きにより、日々を生きる力が与えられるのです。スチュワードシップ月間を覚えつつ、感謝と喜びを持って歩んで行きたいと願います。

2月12日（水） ヨハネの黙示録 2章 25 - 26節

25ただ、わたしが行くときまで、今持っているものを固く守れ。 26勝利を得る者に、わたしの業を終わりまで守り続ける者に、
わたしは、諸国の民の上に立つ権威を授けよう。

主が勝利者に与えると約束するこの権威は、主イエスも父なる神から権威として授けられたものです。主への信仰を守り続ける私たちに、その権威を与えてくださると言うのです。だから様々な苦難や困難のときでも、今持っているもの「愛、信仰、奉仕、忍耐（黙示録2:19）」を主と会う時まで固く守れ、と励まし、力付けてくださっています。



2月13日（木） マタイによる福音書13章24-30節

24イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。25人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。26芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。27僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』28主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、29主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。30刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

神さまはご自分の畑に種を蒔き、手入れをし、成長を見守り、大切に育てます。私たちはその麦なのです。今日のたとえ話ではその麦の中に毒麦も一緒に育っていると語っています。畑に毒麦があるということは良い麦にとっては良いことではありません。しかし神さまは大いなる慈しみと忍耐をもって収穫まで手を出されません。それは善悪を早急に識別し、間違っても良い麦を抜いてしまわないためなのです。

2月14日（金） 詩編126編5-6節

5涙と共に種を蒔く人は
喜びの歌と共に刈り入れる。
6種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は
束ねた穂を背負い
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

どんなに困難な中であっても、御霊の実を結ぶために種を蒔くならば、主は必ず回復を与えてくださり、収穫のときに大いなる喜びが待っています。朝に、み言葉の種を蒔き、夕べに、豊かな刈り入れをする者とならせていただきます。

2月15日（土） 詩編119編13-16節

13あなたの口から与えられた裁きを
わたしの唇がひとつひとつ物語りますように。
14どのような財宝よりも
あなたの定めに従う道を喜びとしますように。
15わたしはあなたの命令に心を砕き
あなたの道に目を注ぎます。
16わたしはあなたの掟を楽しみとし
御言葉を決して忘れません。

詩編119編はとても長いですが、声に出して音読することをお勧めします。迫害や苦しみの時でも、まず主に助けを求めている信仰者の祈りだとわかります。神のみ言葉に信頼し、神の定めに従い歩むことにより、平安が与えられ自分の口から賛美が出てくると、喜びを歌っています。

第46課 「天の国」を共に

聖書箇所：マタイによる福音書13章44-50節

主題聖句：世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。(49-50a)

44「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。

45また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

47また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。

48網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、50燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

今日与えられた聖句には、3つの「天の国」のたとえが記されています。

1つ目、2つ目のたとえは「天の国の存在や天の国への入り方を知った人の行動」を例えた聖句です。

「永遠の命を得て天の国に入る術を知ったら、全財産を売り払い、その後のこの世での自分の人生を犠牲にしてもその権利を得ようとする。」という意味合いのたとえと読み取れます。このたとえを読む時、聖書からだと取税人ザアカイを思い浮かべます。イエスさまを通して救いを追い求め、今まで貯めた財産を投げうってでも従っていこうとする姿がこのたとえと重なりま

す。本来ならイエスさまのことを知った全ての人が同じ行動をとってもおかしくないのですが、ここまで私たちが出来ないのは何故なのでしょう。少し意味合いが違うかもしれませんが、人生を犠牲にするという観点からそれを実際におこなった人として思い当たるのはマザーテレサではないでしょうか。イエスさまがされたように「最も小さき者の良き隣人となる」彼女の思いや姿勢は目指すべきものですが、それを実践するとなるとハードルが高いです。

その実践困難な理由は、私たちが永遠の命や天の国の到来を信じ切れていないから？ 信仰とこの世のことは別だから？ この世での生活、家族のことを考えたら、人生を投げ売ってとまでは…となってしまうかもしれません。勿論、イエスさまを信じる人が全てマザーテレサと同じ様な働きをすることが出来たら、天の国がより近づくのかもしれませんが。

でも、私は人生全てをお捧げ出来なくてもイエスさまを信じて、日々感謝と祈りをもって今の生活を続けていくことで十分だと思うのです。一人ひとりがそれぞれの環境や状況の中でどう信仰生活を歩んで行くか。それを神さまは見ておられ、一人ひとりをそれぞれの用意された救いの道へと導いて下さるのではないのでしょうか。

3つ目のたとえば「天の国が来た時に行われる最後の審判」のことを例えた聖句です。今日の聖句の前にある「毒麦のたとえ」(マタイ13:24~30)に「刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」とあるように、良いものと悪いものを最後に選り分けられると記されています。つまり終末の時まで悪い者も良い者と変わりなく恵みを与えて下さり、育てられていること、そして最後に選り分けがあることもしっかりと語られています。49節の「正しい人々」という言葉に「私はこの中に入れていきますよね」と少し不安を覚えてしまう自分がいます。神さまを信じ、奉仕をしていますが、(イエスさまによって既に許されているとはいえ)多分それ以上の罪を犯してしまっている自分があり、このより分けの時にこれまでの全ての罪を提示され、「あなたは自分のことを『正しい人』だと言えますか」と問われてしまったら…。多分、キリスト教系の新興宗教等の中にはこの辺りを曲解して罪の意識を植え付けているのかもしれませんが。

ただ、この不安は私たちが信じる神さまがどういう方であるかを思えば解消されるのではないのでしょうか。ヨハネ3:16「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」と語って下さる神さままであるので、私たちは只々イエスさまを信じるだけで安心なのです。共にイエスさまを信じて歩んで行きましょう。

～分かち合い～

- 皆さん、それぞれの「天の国」のイメージを共有してみましょう。

今週の聖書日課

2月17日（月）ローマの信徒への手紙8章21-22節

21つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。

世界は良くない方向と向かっていますが、イエスさまはそこに生きる私たちの呻きの全てをご存じでいてくださることを感謝いたします。今苦しくても神さまを信じる神の子どもは、栄光に輝く自由へと導かれる永遠の命への希望が与えられていることを思い感謝いたします。

2月18日（火）箴言3章14-15節

14知恵によって得るものは
銀によって得るものにまさり
彼女によって収穫するものは金にまさる。
15真珠よりも貴く
どのような財宝も比べることはできない。

「主を畏れることは知恵のはじめ。」箴言1:7 aとあ手ります。「主を畏れること」は銀によってに入る何物にも勝り、このことは金にもまさる。又、どのような宝石にも比べられないほど価値があるとされます。貧しい者も、富む者も分け隔てなく持つことが赦されている最高の宝ものです。

2月19日（水）箴言2章2-6節

2知恵に耳を傾け、英知に心を向けるなら
3分別に呼びかけ、英知に向かって声をあげるなら
4銀を求めると同時にそれを尋ね
宝物を求めると同時にそれを捜すなら
5あなたは主を畏れることを悟り
神を知ることによって到達するであろう。
6知恵を授けるのは主。
主の口は知識と英知を与える。

箴言の言葉を通して、全人格的に主が私たちを整えて下さる。それは未熟な者にも、若者にも、賢人にも、聡明な人にも、全ての人に益々、益をもたらす尊い言葉です。聖霊さま素直に受け止め行動できますように助けて下さい。

2月20日(木) マルコによる福音書8章27-30節

27イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。28弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」29そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」30するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

様々なことで意見を求められた時に、当たり障りのない意見を述べてその場を凌ごうとする私たちの弱さはないでしょうか？

主からいただいた知恵によって周りの方を傷付けずに真実を述べられますように。

そして「イエスさまはメシア(救い主)です」といつでも直ぐに証出来ますように、主よお使いください。

2月21日(金) ルカによる福音書9章18-20節

18イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこでイエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。19弟子たちは答えた。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もいます。」20イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」

イエスさまは自分の評判を気にされておられたのでは無く、弟子たちの答えを確認したかったのですね。弟子たち、現代ではイエスさまの元にいる私たちに、自分の意思で一人一人決断して「イエスさまは救い主です。」と告白することを望んでおられるのですね。

2月22日(土) ローマの信徒への手紙10章9-10節

9口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。

私がイエスさまを救い主と信じ告白した時に、このみ言葉は確信を与えてくれました。重ねて『聖霊によらなければ、だれも「イエスは主であ。」とは言え無いのです。』コリ12:3bを知り(神さまが告白させて下さったのだから感謝で素敵なこと)と心が暖かくなるのを覚えました。感謝致します。

第47課 この岩の上に

聖書箇所：マタイによる福音書16章13-28節

主題聖句：あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。(18節)



13イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。14弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」15イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」16シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答えた。17すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。18わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。19わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」20それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

21このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。22すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」23イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」24それから、弟子たちに言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。25自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。26人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。27人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである。28はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」



今週の聖書教育誌の週題は「この岩の上に」です。

イエスさまの公生涯がいつの時代かは聖書には明確には記してありませんが、十字架刑が安息日の前日であり、過ぎ越しの祭りの日であったことから、ヨハネ福音書から宣教活動は3年ほどであったことから紀元30~33年又は28~30年の約3年間だと推定できます。この時、イエスさまは31歳か34歳でありました。前者であるとするなら宣教二年目(32年)の春、過ぎ越しの祭りをガリラヤで過ごされた後にファリサイ派と律法学者との論争があり、バプテスマのヨハネが殺されたことも重なりシリア地方(ユダヤ人の地ではない異邦人の地・ある意味、静かで安全でいられる場所)へと退かれました。

地中海の沿岸のフェニキアのティルス、シドンを経て、ヘロデ大王の三人の息子の一人フィリポが分割領として支配していたフィリポ・カイサリアを通り、ガリラヤ湖の東、ユダヤ人が少なく異邦人の多いデカポリスまで約六カ月をかけて旅をされました。その目的は聖書には記されていませんが、イエスさまはこれよりエルサレムにのぼり、十字架への道を歩まれるまえに弟子たちと最も大切な時を過ごされたのでした。この旅の道すがらに行われた数々の業(カナンの子の娘を癒す・大勢の病人を癒す・四千人の給食)は、救いはユダヤ人だけにあるのではなく異邦人にも及ぶことを象徴しています。

ペトロが信仰を言い表した場所、フィリポ・カイサリアはヘロデ大王が建てたローマ皇帝を崇拜する壮大な大理石の神殿があり、ほかにもギリシャの神々を祭る場所が数多くありました。そのようなローマの世界宗教の威厳に圧倒されるような場所を選ばれて、イエスさまはあえて弟子たちに問うたのです。

「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」イエスさまの問いかけに戸惑いつつも弟子たちは人として考えうる最高の存在として「洗礼者ヨハネ」「エリヤ」「エレミヤ」と言う人がいると答えます。

イエスさまは続けて「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペトロは答えます。ローマ皇帝こそが我らの王としているこの地で「あなたはメシア、生ける神の子です」と偉大な信仰告白をしたのです。ローマ皇帝以外を王と宣言することは身の危険が迫ることでもありました。

イエスさまは、この告白を聞いてペトロがご自分のことを理解して認めていることを喜ばれたのだと思います。これから十字架の道を歩んだ先にはペトロや弟子たちがイエスさまの跡を継いで歩むことを願っておられたからです。この問いかけは実は、今日の私たちにも問いかけておられるのです。

「あなたは私のことを何者と思うのか」と。キリスト教の信仰はイエスさまについて知識を得ることではなく、イエスさまに出会うことであり、イエスさまと人格的に交わることです。

イエスさまはペトロの告白を受けて「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」と言われました。ユダヤ人にとって旧約聖書にある「岩」は救い、守りであり、神を想起する言葉です。「岩」の意味は様々に理解され、カトリックとプロテスタントでは決定的に異なります。カトリックはペトロが教会の礎の「岩」として天の国の鍵を預かり、代々のローマ教皇はその後継者であるとしています。

私たちの信仰はペトロがイエスさまを正しく理解した初めの人であり、それは教会(主の民の集まり)の礎石であることであり、交わりの初めとしての「岩」であると理解しています。ペトロと同じ告白をした人は主の民の集まり(神の家族・教会)の中に次々と迎えられていくのです。ペトロが教会の礎の「岩」ではなく、「岩」はイエス・キリストなのです。

16:20 それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。

この時に多くのユダヤ人がそうであるように、弟子たちがメシアとして期待していたものはローマから解放してユダヤの国を治めるダビデの血を継ぐ地上の王という誤った理解でした。故に、イエスさまは混乱が起きないように、ご自身がメシア・救い主であることを話さないように命じられたのです。彼らはまだ、メシアである真の意味を完全には理解できていなかったのです。そこでイエスさまは十字架と復活への道を語られました。その言葉に動揺したペトロはイエスさまをいさみ始めますが「サタン、引き下がれ。」と逆に厳しく叱責されました。

私たちもしばしば、キリストの信仰を自分の思い描くように理解しようとする弱さがあります。けれども私たちはキリストの道を、御足の跡を、歩むべき存在であることに忠実でありたいと願います。「引き下がれ」は厳しい言葉ではありますが「もう一度、私に従う者として歩め」という願いも込められているのだと感謝して受けとめたいと思われました。それは、サタンはイエスさまに従うことは決してありませんが、私たちはどこまでもイエスさまに従っていきたいと願うならば、たとえ、ひと時、躓いたとしても迎え入れてくださる希望が残されているからです。

「この岩の上に」は、イエス・キリストが隅の頭石となられ、「わたしの教会を建てる」は神の民として招かれた交わりが始まり、代々に続く神の国が地上においても実現したと言われているのだと私には示されました。

～分かち合い～

- ・ 祈っていても自分の願いや思うようにならないときがあなたはありましたか。そのような時にどんな思いがありましたでしょうか。また、解決できた体験があれば分かち合ってみましょう。

今週の聖書日課

2月24日(月) エレミヤ書31章33-34節

33しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。 34そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

「わたしの律法(罪の赦し)を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」わたしたちは主に対してあやまちを繰り返しています。でも、主は大いなる愛をもって赦してくださいます。罪深いわたしたち人間を信じてくださっているのですね。主よ、ありがとうございます。

2月25日(火) エレミヤ書42章5-6節

5すると、人々はエレミヤに言った。「主が我々に対して真実の証人となられますように。わたしたちは、必ずあなたの神である主が、あなたを我々に遣わして告げられる言葉のとおり、すべて実行することを誓います。 6良くても悪くても、我々はあなたを遣わして語られる我々の神である主の御声に聞き従います。我々の神である主の御声に聞き従うことこそ最善なのでありますから。」

「我々の神である主の御声に聞き従うことこそ最善なのでありますから」主はわたしを思い、良い方向へと導こうと、わたしの心:に御声を聞かせて下さいます。しかし、もう一人のわたしがなんとか逃げようとしています。従わずにいると、いつまでも御声が心に残っています。重い腰を上げて行くと「もっと早く行えばよかった」と後悔をします。おろかなわたしですが、わたしの事を思い御声を聞かせてくださる主に感謝致します。

2月26日(水) エゼキエル書34章15-16節

15わたしがわたしの群れを養い、憩わせる、と主なる神は言われる。 16わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする。しかし、肥えたものと強いものを減ぼす。わたしは公平をもって彼らを養う。

主なる神は自分の羊を牧草地に養い言われる。「わたしは失われたものを尋ね求め、追われたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、弱ったものを強くする」神さま、あなたは良い羊飼いです。わたしはあなたに守られ、育てられている子羊です。素直でない子羊で迷惑をかけています。でも、主はいつも愛をもって子羊を見守ってくれています。ありがとうございます。



2月27日（木） ローマの信徒への手紙5章1-2節

1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。

「イエスさまを信じる信仰により神さまとの間に平和を得ています。そして、神さまの栄光にあずかる希望を誇りにしています」イエスさま、あなたは葡萄の木。いつまでもあなたを信じて繋がっています。あなたのそばにすることが幸せなのです。

2月28日（金） ヘブライ人への手紙4章14-16節

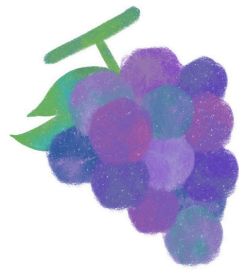
14さて、わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかりと保とうではありませんか。15この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。16だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜になかった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。

「偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのです。ですから、憐れみや恵みにあずかり、助けていただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」イエスさまは、あなたが身を委ねるのを待っておられます。あなたの苦しみ、心配事を祈り委ねてしまいましょう。イエスさまは、最善の道へ導いて下さいます。イエスさま、感謝致します。

3月1日（土） ガラテヤの信徒への手紙2章19-21節

19わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。20生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。21わたしは、神の恵みを無にはしません。もし、人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです」わたしと共にいてくださるイエスさま。心の中におられるので、誰よりもわたしをご存じです。苦しみも、悲しみも、喜びも共に感じて下さいます。「いつまでも一緒に」イエスさま、ありがとうございます。



2025.2 成人科